



Title	中国文化大革命と日本知識人：理解と誤解のあいだ
Author(s)	黄, 芳
Citation	大阪大学, 2012, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/59977
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed 大阪大学の博士論文について

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

1966年中國社會主義の「新しい發展段階」として發動され、十年後に四人組みの逮捕で劇的な幕を閉じた文化大革命は、1981年には中國側から全面否定された。この社會運動は、當時中國全土を激動させ、人民中國にとつて建国後最大の試練となり、國際政治の流れにも大きな影響を与えた。當時日本の知識人たちから大きな関心を寄せられた。日本の新聞報道は懸命にその動きを追い続け、論壇でも、文革をめぐって大論争が巻き起こされた。では中國で起きたこの社會運動は何がゆえに當時の日本知識人たちをそれほどまで刺激したのか。文革當時日本の報道機関や知識人はどのように理解（誤解）したか。本論文は、中國文化大革命（1966～1976）の間、さらに「歴史決議」で文革が完全に否定された1981年までの15年間、日本の大手新聞社（『朝日』『読売』『毎日』『日経』『産経』）、総合雑誌（『朝日ジャーナル』『中央公論』『潮』『現代の眼』など）における文革論とその相互の相違を明らかにし、そのうえで、當時の代表的な知識人の文革理解の遍歴、文革前の体験と研究活動とのつながりを追跡することによって、かれらの文革理解（誤解）が生じた状況を説明する。それを通して日本知識人の中國觀と戦後日本の精神史の一面に光を当てることを目指したものである。

本論文は大きく二つの部分に分けることができる。前半（第一章～第三章）は、文化大革命期における日本の新聞報道と雑誌論文の内容を検討し、いかなる情報が日本に伝えられ、知識人たちがその事態をどのように理解したかを分析したものである。後半（第四章と第五章）は、前半で分析した新聞・雑誌の一般的論調を前提に、文革を熱烈に支持した二人の知識人（菊地昌典と新島淳良）の言説の変化を紹介・分析したものである。

前半は、中國文化大革命の全期間（1966～1976）と、文革が完全否定された1981年の「歴史決議」までの期間を三つの時期に区分した。まず第一章は、文革の第一期（1966年5月～1969年4月）を対象としている。中國側の取材制限により、壁新聞が最大の文革情報源となって、新聞界による文革報道が一番盛んな時期である。「紅衛兵」の造反運動、奪権運動による武闘の混乱、劉少奇批判などの事件が続き、新聞界は文革の展開を「整風運動」とする一方で、権力闘争とみるケースもあるなど、報道にはかなりの混乱と相異があつた。結じて文革を批判する傾向が強かつたが、論壇では、文革を権力闘争として批判するよりも、支持する声が大きかった。ベトナム戦争の拡大に対する危機感、中ソ論争の激化など、中国を囲む深刻な国際状況が文革発動の原因だと捉え、中国を侵略した歴史をもつ日本が、その反省をしないままアメリカに追随していることを批判した知識人が多かったのである。

第二章は、文革第二期（1969年5月～1973年8月）の新聞と論壇の文革論を分析する。九全大会以後、文革が既に完了したと認識し、中国の内政よりも、外交面に多くの比重がかけられた時期だった。国連復帰、ニクソン訪中など、国際情勢の急激な展開に応じて、各新聞社の報道論説は日中復交問題にシフトした。特に文革を厳しく批判していた新聞社の変身ぶりは目を見張るものだった。多くの新聞の論調は、文革の経験を経たからこそ中国の躍進があると高く評価するようになった。しかし、林彪事件（1971年9月）のうわさが9月下旬から徐々に日本に伝えられ、次の時期への変化の予兆がみられた。一方、論壇では、日中復交実現のためには、中国を侵略した過去を反省すべきだとする戦争責任論などが主な課題となつた。林彪事件を論評したものは多くないが、柴田穂と竹内実の論文では、文革派と脱文革派が対立した結果、林彪が敗れたと論じていた。

第三章は、文革の第三期（1973年9月から1976年10月を経て1981年6まで）を扱っている。新聞界は当時、批林批孔運動を「第二文革」と見ていたが、その後の「天安門事件」「四人組逮捕」などの事態の展開に伴い、権力闘争だとみるよう変化していく。また文革を否定した「歴史決議」（1981年）は、日本での従来の文革評価とは著しく異なるものだったので、批判する傾向が強い。しかし、論壇での論評も減少していく、文革を支持していた知識人が文革批判と反省に追いついていた。

論文の後半（第四章と第五章）では、文革支持の代表的な知識人である菊地昌典と新島淳良の主張の遍歴、文革前の体験と執筆活動を追跡することによって、彼らの文革理解（誤解）が生じる様々な要因を考察する。まず第四章では、文革批判代表者の中嶋嶺雄との論争を参照しながら、菊地昌典の文革論を考察した。菊地の戦後の苦しい体験と民衆の重視などの理念は、文革が唱えた「造反有理」「自力更生」「継続革命論」などの理念に共鳴するところがある。かれの思想的背景を追跡することによって、文革支持に至った思想的過程を検討する。

第五章は新島淳良の文革論を検討した。新島は中学時代から現代中国史に惹かれ、管理なし教育の理念、コミ

【3】

氏名	黄芳
博士の専攻分野の名称	博士（国際公共政策）
学位記番号	第25607号
学位授与年月日	平成24年9月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
国際公共政策研究科比較公共政策専攻	
学位論文名	中国文化大革命と日本知識人—理解と誤解のあいだ—
論文審査委員 (主査)	教授 米原謙
(副査)	准教授 中嶋啓雄 法学研究科教授 田中仁 教授 竹内俊隆

ューンへの憧れもあって、文革の理念に見られる革命思想に共鳴し、大きな期待をかけた。しかし文革の現実の進行は彼の期待とは異なったものになっていき、後にはヤマギン会の共同体運動に参画していった。本章では、ヤマギン会での実態調査をふまえて、新島の思想的軌跡を追跡した。

結語では、戦後日本知識人の文革への理解（誤解）について、まとめの考察をおこなう。

当時（特に文革初期）、日中の間には国交がなく、しかも中国は国際的に孤立していたので、情報回路は極端に制限されていた。日本の知識人のなかで、中国を訪れる機会をもつたのはごく少数で、しかもかれらの見聞の範囲は、おそらく一面的であるしかなかった。したがって常駐していた記者たちによる報道は貴重だった。しかも各新聞社の報道姿勢や見解には、明らかに相違が存在していたので、出来事の多面的な側面をそれなりに反映していたといえるだろう。むろん壁新聞などの取材による文革情報は、たくさん氾濫していたが、魚目燕石でもあった。受け手であった知識人たちは、それを個人的な尺度で取捨選択し、想像力や知識を駆使して、出来事を推測した。ここにそれぞれの立場や解釈の相違によって、様々な文革論が生まれ、文革についての様々な「理解」と「誤解」が生れた。

日本の知識人の文革論は、彼ら自身の政治的・思想的体験と深くかかわっている。戦後の日本知識人の多くは竹内好の『現代中国論』などから大きな影響を受け、新中国への熱い思い入れと侵略への反省や、日本社会への批判、変革・革命の願望と重なって、文革は社会主義革命をいっそう徹底させるための民主化運動だと捉え、積極的に評価した。社会主義中国には日本の未来のモデルが示されているとし、その結果、日本の課題というメガネで中国を捉え、対象への期待や理想化を伴う傾向があつたため、文革を実態とは著しく異なる理解（誤解）を行うことになった。菊地昌典や新島淳良の文革理解は、文革の現場で実際に起こった悲惨な側面に無知で、政治スローガンや壁新聞の記述をそのまま信じた点ではあきらかに誤解だった。しかし文革の渦中にあった紅衛兵たちが、菊地や新島が主張した理念を共有していないかったとは断言できない。単に上から動員されただけで、膨大な大衆が動くとは考えられないと推測した彼らは、おそらく出来事の一面を洞察していたのだろう。その意味では、歴史のなかで翻弄された中国の民衆の真実を、彼らは理解していた。

もちろん彼らの「理解」があまりにも一面的だったことは、到底、否定できない。また彼らが自らの理想や希望のメガネを通して、事件を理解しようとしたことも明らかである。しかし、人間の認識というものが常に主観性を免れないといすれば、「誤解」も「理解」の一つのあり方であり、社会変革や日中友好への彼らの情熱は、後世への大きな遺産になろう。

論文審査の結果の要旨

本論文は、1965年から約10年にわたって中国で展開されたプロレタリア文化大革命を、日本の知識人がどのように受けとめて理解したかを精査し、その背景にあった知的状況を解明しようとしたものである。換言すれば、本論文のテーマは、日本人の思想の受容あるいは他者理解の問題と、それを通じた戦後日本の精神史の分析ということになる。論文は全5章で、前半（第1章～第3章）と後半（第4、5章）に分けられる。前半は文化大革命の全過程を通じて全国紙（朝日・読売・毎日・日経・産経）と『世界』『中央公論』『朝日ジャーナル』などの総合雑誌の報道姿勢や記事・対談を紹介・分析したものである。後半の二つの章は、文化大革命を強く支持した代表的な二人の知識人の言論をとりあげ、それを戦後日本の精神史のなかに位置づけようと試みたものである。

まず前半の3章で、著者は文革の全期間を、文革の発動から林彪が後繼者に指名された1969年4月まで、林彪事件と林彪追放が正式決定された時期（1973年8月まで）、四人組の支配と逮捕によって文革が収束した時期の三つに時期区分し、各紙誌が進行中の政治的変動をどのように理解したかを詳細に跡づけていく。著者の分析を通じて興味深いのは、文革について各紙誌の理解が大きく異なり、共産党の権力闘争として突き放してみる見解と、理想的な社会主義の道を切り拓こうとする例のない実験とする高い評価が共存していたことである。また初期には否定的な見解を出していた報道機関も、日中国交回復が実現した第二期になると、微妙にスタンスを移動させて、文革の成果を限定的にせよ認めるにいたる。しかし中国で文革が全面否定された第三期になると、今度は逆に文革の負の側面を理解し得なかったことを自己批判したり、中国共産党の文革決議を威信低下とコメントするなど、実に多種多様な紆余曲折があったことがわかる。以上の3章の叙述はいくぶん平板な印象を与える面もある

が、主要全国紙や総合雑誌の論調をこれほど丁寧に追跡した研究はこれまでなかったことを考慮すると、黄氏の研究は、この分野の研究において先駆的な意義があると評価できる。

第4章と第5章は、ロシア政治研究者だった菊地昌典と中国研究者の新島淳良を取り上げている。二人は1920年代末から1930年代の生まれで、黄氏の分類によれば、戦後第二世代の知識人である。第一世代の知識人は戦後すぐに言論活動を開始した知識人であるのに対して、菊地や新島は、戦中の軍国主義下で少年期を送り、戦後は社会主義の強い影響を受けて思想形成した。1960年代のソ連社会主義はスターリン批判などの影響もあって官僚化したイメージが強かったので、社会主義の理想は中国の動向に向けられた。その結果、紅衛兵運動や知識人の農村への「下放」などの文革の動向は、官僚主義化した社会主義を是正する野心的な実験として受けとめられ、権力闘争のなかで起こった悲惨な側面には目が届かなかった。こうしたかれらの文革理解（むしろ誤解）は悲劇的だが、そこには文革時の中国人活動家が抱いていた理想を共有した面もあり、また戦後日本でエスタブリッシュメントとなっていた第一世代の知識人に対する反発の意図も込められていたという。戦後精神史という観点から、文革支持の知識人の言動を分析した本論文は、なお荒削りな側面があることも否めないが独創的な示唆に富んでいる。

以上により、審査委員会は、一致して提出された論文は博士（国際公共政策）の学位に値すると認定した。